

第二部 エスニック・クレンザー(民族浄化剤)

第一章 退役将軍「シャイ・ロック」

彼の名は『シャイ・ロック』。勿論本当の名前は別にあるのだが、世間では蔭で彼のことをそう呼んでいる。戦闘機のパイロットとして軍歴を歩み出した彼は、数次の東戦争を経て空軍のトップに昇りつめ、「将軍」の称号を与えられた。『シャイ・ロック』と言う呼び名は英国の有名な戯曲『ベニスの商人』に登場する金貸しの名前とそっくりであり彼は決して喜ばない。だから面と向かっては誰も彼のことを『将軍』と呼んでいる。ただ上機嫌な時や外国の要人との面倒な話をまとめようとするときだけ、彼は自らを道化役者に見立てて「私シャイ・ロックとしては……」などと前置きを置くのである。シャイロックと言う言葉を持つイメージを逆用して、相手に畏怖心を与えることも彼の軍師的才能の一つと言える。

『シャイ・ロック』の生涯は常に戦争がつきまとうてきた。既に70歳を超え空軍を退役しているが、今もいろいろな相談事を持ち込まれる。多分死ぬまで彼には戦争の影がつきまとうに違いない。

1 章

第1章 そもそも彼が生まれたのは第二次世界大戦が始まった1939年である。彼の父親はドイツ地方都市のゲットー(ユダヤ人居住地区)で散髪屋を営むごく平凡な市民であった。アシケナジと呼ばれる彼らドイツ国籍のユダヤ人達は社会的には蔑まれ生活は楽ではなかったものの、それなりに平和な暮らしを送っていた。

しかし第一次大戦後の混乱に乗じてナチスが台頭、1933年にヒットラーが政権を握ると事情は一変した。当初は政治犯を収容することが目的であった強制収容所がユダヤ民族を抹殺するための道具となった。ヒットラー率いるナチス党は「民族浄化（エスニック・クレンジング）」の旗印を掲げ、ゲシユタポによる組織的なユダヤ人狩りが始まった。

身の危険を感じた『シャイ・ロック』の父親はシオニズム運動に身を投じ、生まれただばかりの赤子の彼を連れてエルサレムに移住した。もし移住が数カ月遅れていれば残った同胞と同じ運命をたどり彼ら一家はこの世から抹殺されていたであろう。それは危機一髪のドイツ脱出であった。

ユダヤ人の父祖の土地シオンの丘に帰ろうと言ういわゆるシオニズム運動でエルサレムに移住した彼らに待ち受けていたのは厳しい民族紛争であった。当時のエルサレム一帯はイギリスの委任統治領であった。第一次世界大戦でドイツ・オスマントルク連合と戦った英国は、勝つために策を選ばなかった。世界の金融を支配していたロスチャイルドなどのユダヤ資本家を味方に引き入れて戦費を調達する一方、現地ではアラブ民族をそそのかしオスマントルクに対するゲリラ勢力に仕立て上げた。

第1章 第二部

味方に引き込むためには当然その見返りが必要である。戦いに勝ったときの恩賞である。英国がユダヤ人とアラブ人それぞれに約束した恩賞。それはユダヤ人には2千年近く前に滅んだ国家の再建を認めたことであり、一方アラブ人達にはオスマントル

コが支配するアラブの地をアラブに取り戻すこと、すなわちアラブ民族国家の樹立を認めたことであつた。

国家の樹立とは土地を独占的に支配することである。しかし土地には限りがある。英国はそれを承知の上で、一つしかない土地をユダヤ人とアラブ人の両方に分け与える約束をしたのである。ユダヤ人にとってそこは神に約束された土地であり、2千年前の「ディアスポラ（大離散）」で心ならずも追われた祖国の地である。戦争協力と引き換えに英国政府が祖国再建を約束した。それがユダヤ人の言い分である。一方アラブ人もエルサレム地方は有史以来連綿として自分達が住み続けた土地であり、オスマントルコから独立して民族国家を創ることが夢であつた。英国に協力して第一次大戦の勝利に貢献した以上、アラブ人による民族国家を樹立することは当然の権利と考へた。

英国はユダヤ人とアラブ人に二枚舌を使ったのである。第一次世界大戦終了後の結果は明白であつた。ユダヤ人とアラブ人がともに独立運動を展開し、エルサレム一帯はのっぴきならない状態になつた。窮した英国はパレスチナを自国の委任統治領としてユダヤとアラブ双方を抑え込もうとした。当時インド及びマレー半島など東南アジアに広大な植民地を持つていた英国にとってこの地方はアジアの植民地運営の中継基地として必要不可欠だったのである。

『シャイ・ロック』の父親達はユダヤ人の祖国イスラエル建国のため、ある時はアラブ人と戦い、またある時は植民地政府の英国と戦った。パレスチナが英国の委任統治領であって正式な国家ではない以上、そこでの戦いは反政府運動ではなく強い者が勝ち残る秩序なき戦いであった。ユダヤ人にとって負ければ2千年来の祖国再興の夢は潰え去る。彼らは手段を選ばず時にはテロ活動も辞さなかった。

『シャイ・ロック』が物心の付いた6歳の時、イスラエルは独立を宣言した。彼はその時父親が自分を抱き上げて体中で喜びを表せていたことを今でもよく覚えている。しかしその喜びもつかの間、周辺のアラブ諸国が新生国家イスラエルになだれ込んできた。世に言う第一次中東戦争であり、ユダヤ人達はこれを独立戦争と呼んだ。天は必死の彼らに味方した。と言うか、欧米列強特に米国がイスラエルを物心両面で強力に支持したのに対し、アラブ側はソ連の助けが無いうえ内部も烏合の衆だったため敗北したと言うのが実情である。当時のソ連は第二次大戦後の自国の再建に手を取られアラブを助けるどころではなかったのである。「衆寡敵せず」という言葉があるが、中東戦争に関する限り全く逆であり、少数派のイスラエルが圧倒的多数のアラブを敵に回して独立を勝ち取った。アラブ側は完敗、彼らはこの戦争を「ナクバ(破局)」と名付けた。

第1章

第二部 『シャイ・ロック』の父親は勇猛な戦士として頭角を現し、その後の第二次中東戦争でも活躍した。彼は何度も何度も武勇談を息子に語った。いつしか『シャイ・ロック』

ク』は父親の最初の言葉を聞いただけでそれがいつ、どこであった話か解るようになったほどである。それでも彼は父親の武勇談を聞くのが好きだった。ただ父親は独立戦争以前に行ったテロ活動については息子に何も話さなかった。時として無辜の市民を巻き添えにするテロ活動―それは父親自身思い出したくない時代であった。いつの時代でも大義のために無関係の他人が犠牲になる。それが歴史の事実である。そして息子もあえてその頃のことを父から聞き出そうとはしなかった。

偉大な父親に憧れ『シャイ・ロック』は職業軍人を目指して創設期の空軍に入隊した。彼は第三次中東戦争で戦闘機パイロットとして大活躍した。ソ連の対イスラエル断交、エジプトのナセル大統領によるチラン海峡封鎖を契機として始まった第三次中東戦争は、イスラエル空軍の先制攻撃によりエジプト及びシリアは壊滅的な打撃を受け、戦いはわずかの日間で終わった。世に「六日戦争」と呼ばれる第三次中東戦争は、世界にイスラエル不敗神話を印象付けた。勝利の立役者は空軍であった。

第三次中東戦争の後『シャイ・ロック』は米国のイスラエル大使館付武官として家族を伴いワシントンに赴任した。戦争の功績に対する論功行賞である。戦場では沈着冷静、勇猛果敢だが生来口下手の彼は武官とは言え外交官の一翼となることに躊躇した。しかし階級社会の軍隊で上を目指すには米国防駐在武官の経験は願ってもチャンスであり断る理由はなかった。身重の妻も彼の背中を押した。

『シャイ・ロック』のこれまでの人生は戦争に明け暮れ緊張の連続を強いられる生活であった。周囲を取り巻くアラブ諸国に対して連戦連勝のイスラエルであり、『シャイ・ロック』たち軍人の意気は上がり一般国民も過剰ともいえる自信を持ち始めていたが、明日何が起こるかわからない中東では息をつく暇はない。

ワシントンに赴任した彼はこれまで知らなかった世界を垣間見た。米国とその国民は何とのんびりとおおらかな毎日を送っていることか。彼が米国に来たのはこれが初めてではない。独身だった頃、空軍パイロットの訓練生としてネバダの米空軍基地にいたことはある。しかしイスラエルからネバダまでは米空軍機で直行したためニューヨーク、ワシントンなどの東海岸の大都市を見ることはなかった。訓練の休日にロスアンジェルスを垣間見たぐらいである。彼自身訓練に情熱を燃やしていたため休日も単に気分転換する程度で米国事情を探訪する気など全く起こらなかった。何よりも祖国の緊張状態を思うとのんびりした気分になどなれず、一刻も早く戦闘機の操縦技術を習得して祖国の第一線に復帰したいという思いに駆られていたのである。

1章 年齢と経験を重ねた後の二度目の米国赴任は彼の眼を外部に開かせた。末席とは言え大使館付の武官ともなればむしろ外部に目を開くことが期待される。彼の主な任務第それはワシントンに集まる各国の軍事情報や米国の軍需産業の最新情報を収集することであった。そしてもう一つの重要な任務はペンタゴンを中心とする米国の軍関係第二者との人脈形成であり、同時に祖国を物心両面でサポートしてくれる在米ユダヤ人た

ちと密接な関係を築くことであつた。

各国の軍事情報や米国軍需産業の情報を収集する仕事は彼の性に合っていた。米国空軍や航空機メーカーの幹部達とはかつて戦闘機パイロットとしての訓練を受けた時の人脈があり馴染みの顔触れが多い。折に触れて開かれる大使館のパーティーに各国の駐在武官を招待したり、或いは逆に各国大使館のパーティーに出向いて武官同士の立ち話でいろいろな情報を集めた。気になる噂については米英など西欧諸国の武官に直接面談して確かめたりした。

当時のイスラエルにとってはソ連がエジプトやシリアに大規模な武器供与を行っていることがもつとも気がかりだった。彼はそのためイランの駐在武官とも頻繁に情報を交換した。当時のイランは親米派のシャー・パハレビーが国内で絶対的な権力を握っており、軍事面では「ペルシャ湾の警察」と呼ばれ西側陣営の一翼を担っていた。イランとイスラエルは宗教も民族も異なり水と油の関係である。しかし両国は共にソ連及びアラブ諸国と緊張関係にある。両者の間には「敵の敵は味方」という際どい関係があり、その両者を結びつけていたのが米国という共通の絆である。米ソ冷戦の一方の雄、米国のおひざ元ワシントンにおいてイランとイスラエルは緊密な情報交換を行っていた。『シャイ・ロック』は夜遅くまで机に向かって本国に報告書を送り続けた。